

《News Letter from 里山の自然学校 2013》

目次

| | |
|---|----|
| 《News Letter from 里山の自然学校 2013》 第13-01号 《春の里山》 | 2 |
| 《News Letter from 里山の自然学校 2013》 第13-02号 《田植え》 | 8 |
| 《News Letter from 里山の自然学校 2013》 第13-03号 《プールのヤゴの救出作戦》 | 15 |
| 《News Letter from 里山の自然学校 2013》 第13-04号 《ホタル観察》 | 21 |
| 《News Letter from 里山の自然学校 2013》 第13-05号 《夜の昆虫観察》 | 27 |
| 《News Letter from 里山の自然学校 2013》 第13-06号 《案山子づくりと生物調査》 | 35 |
| 《News Letter from 里山の自然学校 2013》 第13-07号 《夏の里山》 | 42 |
| 《News Letter from 里山の自然学校 2013》 第13-08号 《稲刈り》 | 49 |
| 《News Letter from 里山の自然学校 2013》 第13-09号 《脱穀》 | 55 |
| 《News Letter from 里山の自然学校 2013》 第13-10号 《秋の里山》 | 63 |
| 《News Letter from 里山の自然学校 2013》 第13-11号 《冬の里山》 | 71 |

里山の自然学校 2013 第 1 回《春の里山》



日時 2013 年 4 月 21 日(日) 9:30~15:00 雨後曇

場所 生田緑地 ビジターセンター~ピクニック広場~ハンノキ林~田圃~戸隠不動尊跡~城山下谷戸~芝生広場~ビジターセンター

参加者 A 豊島芳璃人、八代舜太郎、小竹森英響、薬袋吹喜音、鈴木優香
B 山本来幸、春田健登、新保善文、目黒陽菜、鈴木彩香、稲垣志帆
C 山根将聖、池田、小林海音
D 山崎慎悟、駒松沙生、佐藤りん、大島弥子

19 人

講師 藤間熙子、中臣謙太郎、岩田芳美、梅原和仁、神山歩未、鈴木志歩、岩田臣生

第 9 期、2013 年度(平成 25 年度)の里山の自然学校を開校しました。

今年度の参加者は 21 人、市内からの参加者が 16 人、横浜市からの参加が 4 人、東京都からの参加が 1 人です。学年別では、中学 2 年が 1 人、小学 6 年が 3 人、同 5 年が 8 人、同 4 年が 9 人です。また、男子が 11 人、女子が 10 人です。

里山の自然学校の経験年数でみると、5 年目が 1 人、3 年目が 1 人、2 年目が 6 人、1 年目が 13 人です。

講師側は前年同様 8 人で行います。

今年は参加者 22 人で開校の予定でしたが、朝の雨が酷かったことなどから、参加を止めた子が 1 人いたため、



今年度は 21 人での開校となりました。

9:30~9:50 を参加手続き時間としましたが、9:30 より早く来ていた参加者もいた反面、集合場所を間違えたりして 10 時に間に合わない子も 2 人いました。

また、1 人は親の都合で欠席、1 人は風邪のために欠席し、第 1 回の出席者は 19 人でした。

今年の参加者は 10 時間際に集中することなく、分散して来場してくれたので、参加手続きはスムーズに進みました。

10:00~11:00 オリエンテーション

今年のオリエンテーションはビジターセンターを使わせていただくことができましたので、雨も気にならず、保護者の方たちも着席していただくことができました。

11:00~11:50

オリエンテーションが終っても雨が止みません。引き続き、室内でアオキの葉を観察しました。アオキは、藤間先生が朝のうちに準備してくれていたものです。

子どもたちにはアオキということはいわずに、この葉について説明してもらうという学習です。

昔、シーボルトが日本に来た時に、持ち帰ったものが英国のキューガーデンにあり、学名を *Aucuba japonica* というのだと説明されました。

子どもたちは、初めのうちは戸惑っていましたが、少しずつ、五感に感じたことをノートに書き始めました。

それから、ノートに書いたことを発表してもらいました。

皆、よく観察していました。



11:50~12:20 昼食

お弁当も室内で済ませました。ビジターセンターは飲食が認められています。パーティションで占有することはできませんが問題ありません。

12:30 野外に出発しました。雨は間もなく止みました。

木々の若葉には沢山のイモムシがいました。イモムシ先生こと、中臣先生は大忙しです。



子どもたちには観察容器を配ってあるのですが、多くの子が素手で扱っていました。



ナナフシモドキの子どもを見つけました。



桜の木の凹みにヨコズナサシガメの幼虫が集まっていた。カメムシの仲間は臭いこと、これを握って刺された子がいたことが話題になりました。

コスミシの花は終わっていましたが、実や種子を弾いた後の空の実も観察しました。

ウグイスの鳴き声が聞こえていたせいか、「ウグイスがいる。」と叫ぶ子どもの手をさす方向にはガビチョウがいました。アズマネザサの根元で何かしていました。





オオバノイノモトソウの新芽はヒョロヒョロとした棒状で面白いと思いました。
 子どもたちは、何かいるかなと生き物探しに夢中になりました。
 赤木先生がササ笛を教えてくださいました。



谷戸へ降ります。
 コナラなどの雄花序が落ちていて、スロープで滑って転んだ子がいました。スロープ階段は雨の日は要注意です。
 花や落葉が落ちている時は特に危険です。高齢者だったら怪我をしていたと思います。

タマノカンアオイを観察しました。花は葉の下に隠れています。
 昔、高名な牧野富太郎という植物学者がこの辺りで見つけて、新種として登録した植物だということを学習しました。川崎市内で発見され、標本を登録された植物はタマノカンアオイだけです。





ハンノキ林上の池にはアズマヒキガエルのオタマジャクシがいました。



ウラシマソウは不思議な形の花を咲かせていました。柿の木の下にはゼリバヒエンソウも咲いていました。明治時代に渡来した中国原産の外来植物です。東京周辺に広がっています。生田緑地では駆除対象にしていることを説明しました。



ゲンゲ(別名レンゲソウ)は雨に打たれて、花期が終わったのかと思われる程あわれな状態になっていました。もう、ゲンゲを知らない子どもの方が多くなっていました。



気温が低く、寒かったせいか、田圃に降りたがる子は一人もいませんでした。

下の田圃周辺ではヨシ笛をつくって遊びました。カサスゲの花序が見られます。カサスゲの葉は非常に丈夫で、スゲ笠などの材料に用いられていたことを学習しました。子どもたちは、ヨシ笛をつくるためにヨシを採ろうと夢中になりました。



戸隠不動尊跡地では、もうミズキが咲いていました。



14:50 ビジターセンターに戻りました。
今日見つけた生物を思い出して、名前をあげてみました。
数えきれない程のイモムシがいましたが、雨と寒さで、その他の生物は少なかったようです。



里山の自然学校 2013 第 2 回《田植え》



日時 2013 年 5 月 26 日(日) 10:00~15:00 曇時々

場所 生田緑地 田圃

参加者 A 豊島芳璃人、八代舜太郎、小竹森英響、薬袋吹喜音、鈴木優香、石井恵梨華

B 山本来幸、春田健登、新保善文、目黒陽菜、鈴木彩香、稲垣志帆

C 林 航大、山根将聖、池田、小林海音

D 山崎慎悟、駒松沙生、佐藤りん、大島弥子

OB 甲斐亮汰

22 人

講師 岩田臣生、岩田芳美、梅原和仁、神山歩未、鈴木志歩、藤間熙子、中臣謙太郎

今年度第 2 回里山の自然学校は田植えです。全員が参加したほか、OBが 1 人参加しました。

活動には生田緑地整備事務所 2 階の市民活動室が使えるようになりました。また、倉庫も広くなりましたので、里山の自然学校の活動拠点として使えることを感謝しています。

着替えや履き替え、雨具などは部屋に置いて、早速、田圃に向かって出発しました。手にはバケツや洗面器を持って行くのは、里山の自然学校ならではの田植えです。

途中、ヤマグワの黒く熟した実を味わっていただきました。普段除伐に励んでいるヤマグワですが、里山の恵みを体



験させることも大切だと思います。

ハンノキ林上の池でアメリカザリガニを見つけた子がいましたが、今日のかまっている暇はありません。

田圃に着いたら、荷物は木陰に置いて、苗を取りに行きました。

下の田圃に運んでおいた苗は、カルガモに悪戯されてはいませんでした。

皆で協力して6枚を上田圃に運びました。



上の田圃に運んだ苗を育苗箱から取り出し、洗面器に小分けしました。

苗を入れた洗面器を持って、全員が田圃の端に並びました。

今回も苗の植え方を教えるのは田植えの先生の来幸ちゃんです。

初めて田植えを体験する子どもたちに、丁寧に教えてくれました。



上の田圃の上の段には水が滲えられていましたが、下の段は周囲の溝を除けば水がありませんでした。子どもたちは、少し硬いぐらいの土に苗を植えていきました。

このままでは問題ですので、皆が植えている周りで、畦のザリガニ穴を塞ぐ活動も行いました。

この日はユニセフのウォークラリーが開催されていて、三浦副市長が通りました。



丁度、皆で植え始めるところでしたが、水の無い田圃の田植えは初めてご覧になったと思います。



上の田圃の下の段の田植えを終えたところで、お昼にしました。もう12時です。今年は時間がかかってしまいました。

昼食後、上の田圃の上の段の田植えを行いました。

お昼のお弁当から参加した子には、来幸先生が丁寧に植え方を教えてくれました。

田圃の中には小さな小さなアズマヒキガエルの幼体やマメゲンゴロウがいました。

田圃の上には連結したシオカトンボが飛び、畦にはヤマ

サナエがいました。まだ、シオヤトンボもいました。



続いて、下の田圃の田植えを行いました。

水の中には大小様々なホトケドジョウが泳いでいました。

ヨシの葉にシュレーゲルアオガエルがいました。

子どもたちにはお構い無しにツバメが泥を求めて飛んできました。子どもたちは、こんなに近くでツバメを見たことは無いと思います。



下の田圃の田植えに参加しなかった子どもはヨシ笛を吹いたり、生き物を探したり、思い思いに過ごしていました。アメリカザリガニやベニカミキリを見つけた子もいました。

田植えを終えた田圃には防鳥テープを張りました。子どもたちも手伝ってくれました。

洗面器を洗う手伝いをしてくれる子どももいました。

静かになった田圃にシマヘビが出てきました。今年の子の中からは、これを捕まえようと追いかける子どもがいました。

作業後に、水路の水を汲んで、手足を洗いましたが、水が少ないので大変だったようです。



防鳥テープを張っている間、子どもたちはオオバコ相撲をしていました。歩未先生はササ笛を教えてくださいました。



下の田圃にも防鳥テープを張りました。3枚の田圃が防鳥テープでカルガモから守れるかどうかは不明ですが、これで田植えが終了しました。



生田緑地整備事務所に戻り、裏の水道で手足を洗い、部屋に戻って、この日出会った生物を振り返りました。次回の「プールのヤゴの救出作戦」は稲田公園の児童プールに集合だということを確認しました。最後に、第1回の時に自己紹介をしていなかった子どもの自己紹介を行いました。



第3回 《プールのヤゴの救出作戦》



日時 2013 年 6 月 2 日(日) 10:00~15:00 曇後晴

場所 稲田公園児童プール

参加者 A 小竹森英響、薬袋吹喜音、鈴木優香、石井恵梨華
B 山本来幸、春田健登、目黒陽菜、鈴木彩香、稲垣志帆
C 山根将聖、池田、小林海音
D 駒松汰生、大島弥子
OB 原田大雅

16 人

講師 岩田臣生、岩田芳美、梅原和仁、神山歩未、鈴木志歩、藤間熙子、中臣謙太郎、山本 晃

今年度第3回里山の自然学校は稲田公園児童プールのヤゴの救出作戦です。

雨の予報は外れて曇のち晴で暑くなりました。

第1回、第2回と休んだ山本先生を紹介するところから活動を開始しました。

プールの排水は到着してから始め、先ず、水の引いた一番浅いプールから救助開始です。

アマガエルと思われる小さなオタマジャクシがいました。一度、落葉のかたまりの中にヤゴを見つけると、子どもたちの動きが一変しました。





2 番目に浅いプールに移りました。



一番深いプールに移動して、ヤゴを救出しました。

「ギンヤンマだ！」の聲に、他の子どもたちは益々夢中になってしまいます。





お昼休みはプールサイドで過ごしていました。



午後の活動を開始しました。



救出したヤゴの個体数を調べる活動も並行して始めました。
 ヤゴを掬うよりも、数える方がいいという子が集まりました。
 日差しが強くなったので日陰で活動しました。



今回救出したヤゴは ヤンマ型 16、シオカラトンボ型 73、アカトンボ型 6,926、イトトンボ型 0、合計 7,015
 でした。

これは過去9回のヤゴの救出作戦における最多の救出数です。
 子供たちの活躍のお蔭です。



ニホンアマガエル成体も捕まっていた。



第 4 回 《ホタル観察》



日時 2013 年 6 月 23 日(日) 16:00~21:00 曇

場所 生田緑地

参加者 A 石井恵梨華、稲垣志帆、佐藤りん、鈴木彩香、鈴木優香...藤間熙子

B 大島弥子、小林海音、薬袋吹喜音、目黒陽菜、山本来幸...神山歩未

C 池田、小竹森英響、新保善文、春田健登、山根将聖...山本 晃

D 林 航大、山崎慎悟、U、甲斐亮太(OB)...岩田臣生

19 人

講師 岩田臣生、岩田芳美、神山歩未、藤間熙子、山本 晃

今年度第4回里山の自然学校はホタル観察です。

生田緑地市民活動室に集合してホタルの話をしました。この間、雨が降っていました。

前回のプールのヤゴの救出作戦で救出したヤゴの羽化状況を報告してもらいました。その結果は、救出した翌日に羽化したものもいれば、まだ羽化していないものもいるとの報告が子供たちからありました。



座学を終えてフィールドに出ました。4回目の活動になると、どこでも笑顔が見られるようになります。



ピクニック広場の草地で植物観察が始まりました。夕方の草地ですが、今年は既にツリフネソウが広がっていました。



里山管理に必要な落葉だめの話もありました。
ハンノキ林の話もありました。ハンノキを見分けられるようになるかな。



アオカラムシの葉上にラミイカミキリがいました。
成虫は5～8月に発生し、イラクサ科のカラムシ、ヤブマオ、アオイ科のムクゲなどを食草とするカミキリムシで、昼間活動し、食草の茎や葉をかじって食べたり、周囲を飛び回ったりします。
幼虫は食草の茎の中に入って茎の髄を食べて成長し、根元～地下茎の中で越冬するようです。



ハンノキ林にはミドリシジミが生息しています。ハンノキ林の固有種ともいべきミドリシジミの話もありました。ハンノキを見分けられるようになったかな。



ハンノキ林は自然林です。湿地林でもありますが、他の植物が入ってきて湿地が陸地化すると、他の樹木と入れ替わって消えていきます。そんな湿地や水流には辛うじて生き残った多摩丘陵の谷戸の多様な生物が生息しています。その代表が、ここで命をつないできたゲンジボタルです。





湿地に生えたハンノキも大きくなりました。でも、ミドリシジミの姿は見つかりませんでした。

モグラ塚でナガヒョウタンゴミムシを見つけた子どもがいました。



コクワガタのメスだと思ったようでした。

川崎の記録は 2006 年のものが最新であったため、標本として青少年科学館収蔵庫に収めることにしました。

皆が田植えをした田圃の苗はしっかり育っていました。ただ、カルガモに倒された苗は枯れていました。



ヨシ笛づくりが始まりました。上手くふける子は少なく、今の子どもたちには難しい技のようです。





コバノカモメヅルの花が見られました。下の田圃の稲も順調に育っています。



ヨシ原のハンノキにはミドリシジミが5~6匹群れていて、オス同士の卍巴(まんじどもえ)と呼ばれる飛翔が見られました。多数のミドリシジミが集まっている、このハンノキは萌芽更新したのですが、ミドリシジミにとって良い条件にあるのかも知れません。





子どもたちにとってはアリの行列も興味深い対象のようです。

コウガイビルを見つけた子がいました。



これは扁形動物門ウズムシ綱ウズムシ目コウガイビル亜目コウガイビル科コウガイビル属に属する動物です。何の仲間かと聞かれましたが、陸上にいる仲間は思いつきませんでした。水中にいるプラナリアが仲間です。

枳形山広場で夕食のお弁当を食べました。



19時を過ぎてからホタルの国に向かいました。ホタルの国では4班に分かれて、ホタルを観察しました。この日、ホタルの国のホタルは89、出現のピークでした。入国者は前日とは比べものにならないものの、1000人を超えていました。

子どもたちは、すっかり舞い上がってしまい、最後に感想を聞いたのですが、テープ起こし不能の状態でした。皆の興奮が冷める気配がありませんでしたが、迎えに来たご家族に委ねました。



第5回《夜の昆虫観察》



日時 7月28日(日) 16:00~21:00

場所 生田緑地

参加者 A班/豊島芳璃人、八代舜太郎、小竹森英響、薬袋吹喜音、鈴木優香、石井恵梨華

B班/山本来幸、春田健人、目黒陽菜、鈴木彩香、稲垣志帆

C班/山根将聖、小林海音

D班/山崎慎悟、駒松汰生、佐藤りん、大島弥子

18人(含む、氏名非記載者1人)

講師 岩田臣生、岩田芳美、梅原和仁、鈴木志歩、藤間照子、中臣謙太郎、山本晃

第5回里山の自然学校は夜の昆虫観察です。

川崎市青少年科学館に置いてあったライトトラップ装置を生田緑地整備事務所裏の倉庫に移しました。

ところが、ランプ固定用の脚立が無くなっていました。雨の心配がなかったので、ライトトラップをしてもいいと思ったのですが、脚立が無ければ行えません。今回は諦めることにしました。

集合は生田緑地整備事務所市民活動室を使いました。

ここでは挨拶と活動予定の説明を行い、遅れている子が到着するのを待ってから、4時過ぎではまだ暑かったのですが、フィールドに出ました。

整備事務所近くに、ツクバネウツギ(アベリア)がありました。今年 7 月はジャコウアゲハの姿を良く見かけました。園芸種の植栽ですが、昆虫の吸蜜源として役立っています。

毎年観察するクヌギの樹液レストランは、今年はスズメバチがよく来ていたので、生田緑地の指定管理者が注意札を置いて、近づかないように警告しています。

それでも素通りはできません。山本先生が樹液に集まる昆虫の話をしました。

樹液レストランには、たくさんのカナブンとクロカナブン、スズメバチ(種は確認せず。)が来ていました。

そこに、アカボシゴマダラが飛んできました。

中国原産の外来生物であるという話をしました。一人の虫屋の勝手な行動がつくってしまった外来種だということをお話すると、その人は何のために日本に持ってきたのかという質問がありました。

ニイニゼミに加えてヒグラシも鳴いているのは、夕方なのだと思います。蝉時雨の中を、谷戸に降りました。

手摺りにはアオバハゴロモ幼虫が、近くの葉上にスケバハゴロモ成虫がいました。



水田ビオトープ班では、昨年からの落葉だめも使用再開しました。その落葉だめが気になった先生もいたようですが、ここは 5 月の連休の頃から中を探っていく親子がいますので、狙いのものは見つからなかったようです。白い花を咲かせているのはヤブミョウガだということをお話



藤間先生が説明しました。

大きなイヌシデの高さ 10mほどの所に、スズメバチの巣がありました。

巣が大きくなっているので近づかない方がいいと思います。デッキから、子どもたちに観察させました。





アメリカザリガニの話をしよとしましたが、この日、トラップに入っていたのは小物だけでした。

サンショウがありました。サンショウの葉を食べてみた子もいました。

タマアジサイの花が咲いていました。

普通のアジサイの方が綺麗だという子がいましたので、普通のアジサイは一度外国に出て、品種改良されて戻ってきた種だという話をしました。



昨夜咲いたカラスウリの花が気になった子もいました。今夜はきっと咲いているところを見られるでしょう。

草地にはバッタやキリギリスの仲間の幼虫がいました。ヒシバッタもいました。

ササキリの幼虫は、子どもたちにも、不思議な虫に見えたようです。



サワガニが捕まりました。でも、赤いサワガニです。

シユレーゲルアオガエルの幼体が多数いました。



オニグモの仲間と思われる綺麗なクモを見つけた子がいました。

ヤブミョウガの花とミョウガの花を観察して比べました。

セリの花が咲いていました。



ホトケドジョウを観察しました。



ヨシを見つけるとヨシ笛を楽しむようになりました。



クサギの花が咲き始めていて、クロアゲハ♂が吸蜜にきました。

アミガサハゴロモがいました。ハゴロモの仲間はこれで3種目です。

生田緑地では、アオバハゴロモ、スケバハゴロモ、アミガサハゴロモのほか、ベッコウハゴロモを観察できます。

ジュズダマの花も咲いていましたが、クロコノマチョウの幼虫は見つかりませんでした。今年はどうしたのでしょうか。

オニヤンマが谷戸を上下していました。

園路わきの草に、オオシオカラトンボが休んでいました。

ルリタテハもいました。



オオシオカラトンボも捕まってしまいました。
ノカンゾウが橙色の花を咲かせています。
また、シュレーゲルアオガエル幼体が捕まってしまいました。



コバノカモメヅル、シオデなどを観察しました。

コガマの穂が出ていました。



この柱は何か。子どもたちは素直に疑問を持ちます。
戸隠不動尊の焼け跡に建てられたものです。
不動尊とは何かという質問には答えられませんでした。どのように話せばいいのかわかりませんでした。
立っている石の柱は、戸隠不動尊焼失後に記念碑として建てたモニュメントの一部です。



枅形山広場で夕食のお弁当を食べました。



暗くなり始めたところで、穴から出てこようとするセミを探しました。
穴の中に、可愛い顔が覗いていました。



アリジゴクの観察も行いました。

今年、アリジゴクの採集に成功したのは一人だけでした。



続けて、夜の自然観察を始めました。

餌を求めて階段の手すりに出ていたヤモリがいました。

カラスウリの花を観察しました。暗くならないと咲かない不思議な花です。



一部の子どもたちはスジグロボタル幼虫の光の明滅も観察しました。

階段の手すりにアカイラガの幼虫がいました。

稲目谷戸の降り口に戻ったところで、カブトムシで遊びました。

生田緑地から持ち出した幼虫を羽化させたものを、生田緑地に放しに来た人がいたようです。

ニイニゼミの羽化ポイントに移動しました。
あちこちで羽化が始まっていました。



帰り道、舗装された園路を横断しているアブラゼミの幼虫が2ヶ所で見られました。

谷戸の降り口に戻って、感想を聞き、解散しました。



第 6 回《案山子づくりと生物調査》



日時 8 月 4 日(日) 10:00~15:00

場所 生田緑地

参加者 A班／小竹森英響、葉袋吹喜音、鈴木優香、石井恵梨華

B班／山本来幸、目黒陽菜、鈴木彩香、稲垣志帆

C班／山根将聖、池田、小林海音

D班／駒松汰生、佐藤りん、大島弥子

15 人(含む、氏名非記載者 1 人)

講師 岩田臣生、岩田芳美、梅原和仁、鈴木志歩、藤間熙子、山本 晃

第 6 回里山の自然学校は案山子づくりと生物調査です。

集合は生田緑地整備事務所市民活動室です。

子どもたちが来る前に案山子の頭部(下地)を用意しておいた竹の先端に縛り付けました。竹の長さは 4m、頭部の中身は籾殻です。

案山子の服は参加者の一人が寄付してくれるというTシャツの予定で、腕となる竹は切り込みだけ済ませて、後は案山子づくりチームに任せることにしました。

この日の参加者は15人でしたが、案山子づくりを希望したのは5人でした。作業としては丁度良い人数です。残る10人はザリガニ釣りをすることにしました。

案山子づくりは屋外、谷戸への降り口のデッキで行うことにしました。

案山子の大きさが4mもあるため、室内に入れることも、出すことも困難なのです。



ハンノキ林上の池はヤブヤンマの産卵場所でもあるのですが、夏になってアメリカザリガニが急増していて、何とか駆除を急ぎたいと思っていました。

初めの頃の里山の自然学校では、この狭い池に皆で入って、手網で掬って、駆除をしていました。しかし、慣れた子どもたちがアメリカザリガニをもてあそぶようになってしまったことから、駆除活動に参加させることを控えていました。アメリカザリガニは神奈川県某所に設けられたウシガエルの養蛙場に、ウシガエルの餌とすべく北米から輸入したアメリカザリガニを入れていたものが逃げ出して野生化したものです。このため、60年前でも県内では普通に棲息し

ていて、ザリガニ釣りは子どもなら誰でもしていた遊びでした。

でも、それは昔のことで、今回参加した子どもたちに聞いてみると、ザリガニ釣りを経験したことが無い子どもが多いことが分かりました。

そうすると、釣り上げることができるかどうか不安でしたが、一つの自然遊びとして体験してもらうことにしました。

大量に釣ってくれれば、子どもにとっての自然遊びが、この場所の生物多様性を守るための活動にもなるのです。

この池はデッキからの階段などがあるために手網での採集が難しいのです。トラップを仕掛けているのですが、悪戯も多く、また小さいものは自由に逃げられてしまいます。そこで、ザリガニ釣りがいいと思っていたのですが、来園者の多い場所で、大人がザリガニ釣りをするのは躊躇われました。

釣竿は園路わきのアズマネザサで、大きく伸びて、頭を下げて、辺りの雰囲気を変えているようなものを選択して利用しました。

糸はタコ糸を、餌にはスルメを用意しました。



案山子づくりチームが案山子を担いでやって来ました。



まだ11時半でした。案山子づくりチームも、ザリガニ釣りに興味津々です。

藤間先生が午前中で帰るというので、この場で集合写真を撮りました。初めてだと思いますが、手摺りの上に置いて、セルフタイマーを使って撮影しました。



お昼も、この木陰で済ませることにしました。

食後、案山子づくりチームもザリガニ釣りをしたいということで、もう暫く、ザリガニ釣りをすることにしました。





アメリカザリガニ大中小合わせて 75 匹を釣り上げることができましたが、まだ、岸近くの水が澄んでいる所にアメリカザリガニの姿が見られました。

釣竿や糸、餌を片付けて、田圃に移動しました。
案山子は案山子づくりチームが担ぎました。



上の田圃に案山子を立てました。



案山子を立ててから、稲の状態を観察しました。まだ、花穂が出ていません。

田圃の隅に置いてあった余った苗からは花穂が出ていました。田圃の水が非常に少ない状態が続いていたので、窒素肥料分が効き過ぎてしまったかも知れません。

例年のように田圃の外周に入って、手づかみで小さなアメリカザリガニを採ることにしました。水が少ないので、生物調査にはなりそうもありません。採集で来たアメリカザリガニは大中小合わせて 55 匹でした。





14時には止めて、市民活動室に戻りました。
そして、感想文を書いてもらい、それを発表してもらいま
した。



第 7 回《夏の里山》



日時 8 月 17 日(日) 10:00~15:00

場所 生田緑地

参加者 志歩班/石井恵梨華、小竹森英響、小林海音、佐藤りん、薬袋吹喜音、山根将聖
歩未班/稲垣志帆、大島弥子、目黒陽菜、八代舜太郎、山本来幸

12 人(含む、氏名非記載者 1 人)

講師 岩田臣生、岩田芳美、梅原和仁、神山歩未、鈴木志歩、山本 晃

夏のプログラムが「夜の昆虫観察」、「案山子づくり」、「夏の里山」と続き、猛暑のせいもあると思いますが、負担を感じるようになっていきます。来年度は回数を減らさせてもらおうかとさえ思い始めています。

何回かの活動を通して友達ができると、その友達数人だけの世界をつくってしまって、皆と一緒に学習するという雰囲気ではなくなってきて、運営する側にとっての楽しさが低下してきたように思われました。

そこで今回は強引に 2 チームに分けて、少し競争させてみることにしました。

チームはジャンケンで決めました。仲良しグループを少し崩す試みです。

真夏の里山は出会える生き物が意外と少ないのです。生き物を探して、見つけた生き物の数を競わせることにしました。如何に目や耳を使って観察し、記録するかが問われます。記録していないと、発表する時に忘れていて、名前をあげることができないこともあります。

植物は花や実を確認できたものだけにしました。

にわか仕立てのチームの勝敗を、子どもたちがどれだけ意識するか分かりませんが、里山観察をより活発にしたいという試みです。

暑さの厳しい野外に出ました。

早速、何か見つけたようです。ただ、勝敗を意識して他の人に教えないようにしたために、結局、最後の発表の時には忘れていて名前をあげることができなかったということもあったようです。これも勉強ですね。

クヌギの樹液レストランには沢山のクロカナブンと2~3匹のスズメバチ、サトキマダラヒカゲなどが来店していました。

観察している時に、警備員が割り込んできて、「ハチがいるから近づくな」と注意されましたが、毎年観察している足場の良いポイントでもありますので続けさせてもらいました。

生田緑地の生物多様性は、こうした観察ができることも大切なことです。立ち入り禁止の注意看板は「蜂がいるから～」とあるのですが、足場の良い所では、クヌギなどの樹液レストランにはどのような昆虫が集まってきて、何をしているのか、また彼らにとって如何に大切なレストランなのかを説明するものであってほしいと思います。

そして、その中にはスズメバチの仲間がいること、観察する時はどんな注意をしなければならないかの注意書きが必要なのだと思います。

この場所は、そんな夏の昆虫たちを観察できる数少ない場所です。雑木林の林床の植物を保護したり、崖面の土が崩れるのを防いだりするために樹液レストランへのアクセスを禁止したり、近くに巣がある林内への立ち入りを禁止する場合の注意看板とは別の扱いにするべきだと思います。



手摺りにヨコズナサシガメの幼虫を見つけました。

ウスバカゲロウがいました。夜の昆虫観察の時に夢中になったアリジゴクの成虫です。



ピクニック広場の草地では、種子をつけたヤブミョウガ、タケニグサ、ウマノミツバなど、蕾や花をつけているイノコヅチ、ミズヒキ、キンミズヒキ、キツネノマゴなど、ヤマトフキバツタ、アオバハゴロモ、カメムシ類幼虫などに出会いました。



ピクニック広場下の草地にはチヂミザサが咲いていました。ホタル・ランタンにはクモが巣をつくっていました。



ハンノキ林の中では、ホウチャクソウの実が黒く熟し、アキノタムラソウやタマアジサイの花が咲いていました。



カマキリの脱殻を見つけました。

ホタルの里では、イネ、ミソハギ、セリ、ノカンゾウ、ノブドウ、ジュズダマ、アメリカセンダングサ(帰化種)、ヌスビトハギ(大部分が切られていましたが)、クサギ、イノコヅチ、コバノカモメヅル、ユウガギクなど、実ではミヤマシラスゲ、オニスゲ、ヤブミョウガ、コガマなど、沢山のオオシオカラトンボやシオカラトンボ、オニヤンマ、ナガサキアゲハ、キタキチョウ、ヒメウラナミジャノメなどに出会いました。



田圃の稲は花の盛期を終えてオジギを始めた穂もありました。



少し早目ですが、戸隠不動尊跡でお昼のお弁当にしました。木陰は風が抜けています。ショウリョウバッタ、ナガサキアゲハ、ジャコウアゲハなどに出会いました。





芝生広場に移動しました。
ヒグラシ♂が捕まりました。
カブトムシ♀とコクワガタ♂が捕まりました。
やっと、夏の里山を代表する生物に出会えた感じがしました。
初めに見つけた梅原先生はすっかり少年に戻っていました。





昼間の里山でカブトムシとコクワガタに出会えたことで盛り上がっていましたが、帰途に着くことにしました。タマムシの死骸を拾った子どもがいました。アカボシゴマダラが捕まりました。



活動室に戻って、出会った生物を書きだしました。まずは、志歩先生の班です。続いて、歩未先生の班です。



負けたくない志歩先生の班からの追記も始まりました。次に、両方に共通に書きだされた生物を見つけて赤線を付していきました。

それから、出会った生物の数を数えました。



両方の班が出会ったと記録された生物は 28、志歩先生のチームだけ記録された生物は 22、歩未先生のチームだけ記録された生物は 40、総計は 90 でした。大部分は両方で記録されるものと思っていましたが、大きく外れました。

次に、気分転換というわけではありませんが、全く違う、手を動かす活動を行いました。カナムグラの葉を画用紙の上に乗せて、上からコップの底で擦って、植物が持っている液だけで葉を写し取ろうという遊びです。

日頃、駆除に明け暮れているカナムグラですが、この日は役に立ってくれました。



最後に感想を聞いて解散しました。



第 8 回《稲刈り》

日時 10 月 6 日(日) 10:00~15:00

場所 生田緑地

参加者 3年目 山本来幸

2年目 駒松汰生、林 航大、春田健登、山崎慎悟、八代舜太郎、山根将聖

1年目 石井恵梨華、稲垣志帆、大島弥子、小竹森英響、小林海音、佐藤りん、薬袋吹喜音、目黒陽菜

OB 甲斐亮汰

17 人(氏名非記載者 1 人を含む)

講師 岩田臣生、岩田芳美、梅原和仁、藤間熙子、山本 晃

サポート 下口達夫、鈴木潤三

今日は稲刈りです。岩田は稲束を縛るためのイネワラなどを持って先に田圃に降りて、田圃の堰を外して水を落とすなど準備を済ませて、サポートに駆けつけてくれた水田ビオトープ班の2人と田圃で待っていました。

子どもたちは市民活動室に集合し、4人の先生に連れられて田圃に向かいました。

途中、ピクニック広場にもツリフネソウが咲いていましたが、子どもたちはクモの巣に散りばめられた水滴が綺麗だと感心していました。

田圃に着いたところで、荷物はシートの上にまとめて置きました。

それから、今日の活動のサポートに来てくれた水田ビオトープ班の団員2人を紹介しました。

ここは一般の来園者が通ります。その中には、子どもたちに話しかけてくる人もいます。

そこで、子どもたちが、そんな人たちとサポートメンバーの区別ができるようにしておく必要があります。

また、稲刈りの前に、今を盛りと咲いているオオミゾソバとツリフネソウを観察しました。

いよいよ稲刈りです。

今回は参加者が 16 人(朝の時点で)でしたので、稲刈りは2人ずつで組んで1本の鋸鎌を使うことにしました。

鋸鎌を使うのは初めてという子どもたちのために、3年目の山本さんに実演指導をお願いしました。

子どもたちは裸足になって田圃に入り、思い思いの場所から刈り始めました。

田植えの時と同じように水の残る泥田の稲刈りは他では経験できないと思います。

刈り入れが始まると直ぐに木道の上も忙しくなります。今年は、下口、鈴木、山本と岩田が稲束づくりを行いました。この縛る作業は、慣れてコツを知っている人か、力のある人が行う必要があると思っています。

しっかり縛れていないと、オダにかけてから稲穂が抜け落ちてきます。





上の田圃の上の段の稲刈りが終り、下の段に取り掛かりました。





下の段の稲刈りも終わりました。

稲刈りをしながらも、ケラ、セスジスズメの幼虫、ベニスズメの幼虫、アメリカザリガニなどとの出会いがあったようです。セスジスズメやベニスズメの幼虫は、毎年、田圃の中のチョウジタデに見られます。



(左)ベニスズメ、(右)セスジスズメ

上の田圃の稲刈りを終えて、お弁当にしました。

昼食後の休憩時間には、田圃に入って、アメリカザリガニやホトケドジョウと遊んでいる子もいました。

下の田圃の稲刈りを始めました。

オオミゾソバが花盛りです。





下の田圃の稲も皆で運んでオダにかけました。



稲刈りを終わりました。殆んどの子どもは生き物と触れ合いながら、泥田の稲刈りを満喫したと思います。



集合写真を撮り終えたところで、オダが悲鳴をあげて崩れました。皆、唖然として言葉ができません。子どもたちに手伝ってもらって、倒れたオダから稲束を外しました。



時間がなくなっていたので、子どもたちは藤間、梅原が指導して市民活動室に戻り、解散しました。山本、下口、岩田、岩田はオダを立て直し、稲をかけ直してから帰りました。



第 9 回《脱穀》



日時 10 月 14 日(月) 10:00~15:10

場所 生田緑地

参加者 3年目 山本来幸

2年目 駒松汰生、山崎慎悟、八代舜太郎、山根将聖

1年目 池田龍平、稲垣志帆、小竹森英響、小林海音、佐藤りん、新保善文、鈴木彩香、鈴木優香、
薬袋吹喜音、目黒陽菜

OB 甲斐亮汰

17 人(含む、氏名非記載者 1 人)

講師 岩田臣生、岩田芳美、梅原和仁、神山歩未、藤間熙子、山本 晃

サポート 政野祐一、Paul Massie

今日は脱穀です。幸い雨は翌日に延びました。

9時から生田緑地整備事務所のバックヤードの掃き掃除など、脱穀の準備を始めました。作業のためのブルーシートを敷いて、脱穀機と唐箕を出しました。

脱穀はプログラムの中で最も大変な活動です。サポートには、今朝入団手続きをした政野さんと先月入団したばかりの Paul Massie さんが参加してくれました。

集合は10時、市民活動室。この日の参加者は17人でした。





脱穀は田圃から稲を運ぶことから始まります。

6日、7日と何回も崩れたオダは、その後は崩れずに、1週間の天日干しができました。

1人2往復で、全ての稲を運び終えました。



いよいよ脱穀です。使う器具は、神奈川懸橋樹郡生田村の細王舎第一工場製の「ミノル式親玉號」最新型イネコキ機です。

脱穀は、ドラムを回転させるのは先生が行います。子どもたちは、しっかりと稲束を握って、放さないで、イネコキ

をしてくれるように説明し、一人一人確認していきました。その脇で、山本先生と Massie さんが、子どもたちが握れる太さに稲束を作り替えてくれました。







一回りしたところで脱穀機のサポートは交代しました。





別のシートの上で、脱穀した粃から藁クズなどを取り除く活動を始めました。
 大きな藁クズを取り除いたものは唐箕を使って、粃だけを選別することになりました。
 この唐箕を使うのは今回が初めてです。ともかく、やってみようということで始めました。





12 時になったところで、お昼のお弁当にしました。天気が良かったので、外で食べる子もいました。午後の部が始まりました。





稲穂が残り少なくなったところで、先生方も1回ずつ脱穀を行いました。



脱穀が終わりました。終わったところから片付けも始めました。



15時を過ぎてしまいました。
急いで片付けて、集合写真を撮りました。



定刻を過ぎていましたが、部屋に戻ってから解散しました。



第 10 回《秋の里山》



日時 11月23日(土) 10:00~15:00

場所 生田緑地

参加者 3年目 山本来幸

2年目 駒松汰生、林 航大、春田健登、山崎慎悟、山根将聖

1年目 稲垣志帆、大島弥子、小林海音、佐藤りん、鈴木彩香、鈴木優香、薬袋吹喜音、目黒陽菜

OB 甲斐亮汰

15人

講師 岩田臣生、岩田芳美、梅原和仁、藤間照子、山本 晃

山本先生がアサギマダラの幼虫と蛹、ヤママコとウスタビガの蛹の脱殻を用意してくれましたので、まず、これらの観察から始めました。

アサギマダラの食草はキジョランで、幼虫で越冬します。生田緑地でも成虫を見ることがありますが、キジョランがありません。長距離の旅をするチョウです。

幼虫が目立つ色彩なのは毒を持っていることを誇示しているのだと考えられています。

ヤママコは日本の代表的な野生の蚕です。天蚕糸と呼ば



れる絹糸がとれます。

ウスタビガもヤマムコガ科の蛾ですが、卵で越冬します。その卵を観察させてくれました。

藤間先生から今日の活動についての話がありました。落葉を拾って、図鑑をつくるという課題を与えました。また、この時期でも咲いている花があるか、探してみようという課題が出されました。

生田緑地整備事務所前のヒイラギが花を咲かせていました。11～12月に花を咲かせるモクセイ科の常緑樹です。良い香りがします。外に出ると直ぐに、ドングリ拾いに夢中になりました。



谷戸へ降りる階段の途中にヤブムラサキの紫色の実がなっていました。ヤブムラサキの葉の表面には柔らかい毛が生えているので、触るとピロードのような柔らかな触感でムラサキシキブとの違いが明らかです。

アワブキの葉が黄葉していました。実は9～10月に赤く熟すのですが、ここのアワブキの実は見ることがないかも知れません。アオバセゼリノの食樹です。蛹を探しますが、そう簡単には見つかりません。アワブキの黄葉は緑色のまだら模様が残り、くすんだ橙黄色です。



コナラのドングリが発根していました。長いものでは20cmを超えるものもあります。子どもたちは、その根の長さを競っていました。コナラは地表に転がっている状態で発根し、冬を越して、翌春に本葉を広げた実生が自然探勝路脇に多数見られます。しかし、更に冬を越して大きく成長するものは無く、毎年同じ光景が繰り返されています。それは何故かと考えることも大切です。

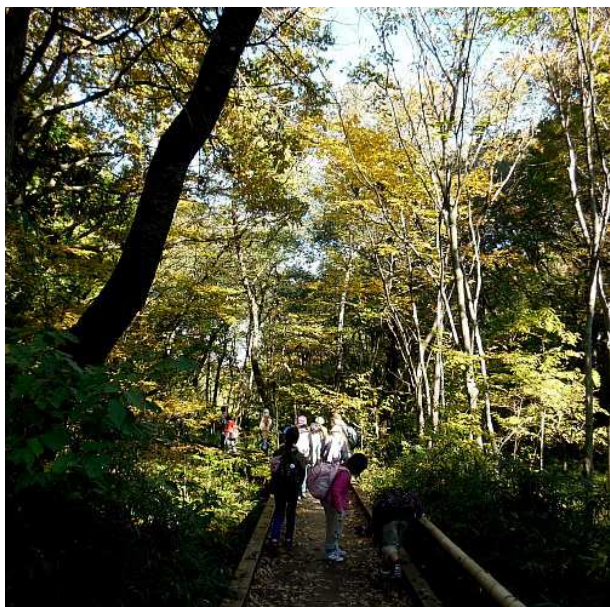


落葉が多くなってきましたが、上に寝転んで遊べる程ではありません。落葉を掬って放り上げたりする程度ですが、自然を遊ぶことも大切だと思います。

勿論、降り積もった落葉を踏む音を楽しみながらの散策も、これからの季節ならではの楽しみですが、来園者が多くなって、落葉が踏み潰され尽しているのは興醒めでもあります。



カラスウリの実が赤く熟していました。
アオマツムシの死骸が手摺りの上にありました。
ハンノキ林の黄葉も、日毎に進んでいます。



まだ、野菊の仲間のシロヨメナが咲いていました。

このシロヨメナは、執拗に生えてくるアズマネザサを刈るという管理をしています。



ヒヨドリジョウゴの赤い実がなっていました。

美味しそうという子がいましたが、神経に作用するソラニンという毒があります。ソラニンは主にナス科植物にふくまれるもので、ジャガイモの表皮や芽、ホオズキなどに含まれていることは良く知られています。



クスノキ科のシロダモは赤い実と花が一緒に見られます。種子が熟すまでに1年かかる常緑樹です。

ムクノキの実は干しブドウ状態を過ぎて、硬くなっています。

ムクノキは国内では関東以南に分布します。4~5月に花を咲かせ、径1cm程の果実をつけます。熟すと黒紫色になり、甘くて食べられます。ムグドリ、ヒヨドリ、オナガがよく食べるといいますが、このムクノキの実はまだ硬く残っていました。





コバノカモメヅルの実が幾つもぶら下がっていました。
ガガイモ科のコバノカモメヅルは7～9月に開花し、この
ような袋果(実)をつけます。

コバノカモメヅルは関東～中部～近畿に分布しますが、
密度は低く、生田緑地内でも生育場所が限られています。
ツル性で、他の植物にからみつきますから、見た目重視
の里山管理では排除されてしまうかも知れません。



カサゲは風によるものか、寝てしまっています。
子どもたちは、木道の上でも、ドングリ拾いに夢中になっ
ていました。



戸隠不動跡のイチョウの黄葉は辺りを明るくしています。
これにモミジの紅葉が合わさって華やかな雰囲気にな
っています。

色鮮やかな落葉を探す子もいれば、モミジの種子を飛
ばして遊んでいる子もいました。



戸隠不動尊跡から城山下谷戸に降りました。

苗木畑付近の園路に面した場所の草刈りは、今年、指定管理者を構成している富士植木が草刈りをしてくれました。範囲と時期を限れば全てを刈ることができるような場所は富士植木に委ねていきたいと思っています。この季節はアブラチャンの黄葉が素晴らしいので、草刈りを終えたばかりの苗木畑付近に入って、集合写真を撮りました。

アブラチャンはクスノキ科の落葉樹で、3月下旬～4月初旬、葉を出す前に淡黄色の花を咲かせ、樹冠全体が淡い黄色に染まります。花の時期も良いのですが、黄葉の季節も、城山下谷戸のこの辺りのキーになってくれています。



芝生広場に着きました。今日のメインイベントはこの紅葉だと思っていましたが、丁度良いタイミングだったようです。



ここで、お弁当を食べました。





午後はイネワラを使って、縄をない、リースや馬をつくる活動を生田緑地整備事務所裏で行いました。縄のない方は山本先生が指導しました。



リースをつくったら、次はウマに挑戦です。比較的簡単に作れて、リースにつけることもできます。

長い縄を作って、縄跳びを始める子どもたちもいました。こうした遊びは前年にも参加していた子どもが、翌年は先頭に立って始めるという形で伝えられます。子どもたちの間だけで遊びが伝えられていく現場に立ち会うという経験をさせてもらいました。



時間になって片付けてから室内に移動しました。片付けは、何人かのこどもが率先して手伝ってくれました。



室内に移動してから、落葉図鑑づくりは押し葉にしてつくるという説明をして、図鑑づくりは宿題としました。その後、皆で、田植え、稲刈り、脱穀を行ってきた生田緑地米(玄米)のおにぎりを食べました。



それから、皆が作ったリースを囲んで写真を撮りました。

最後に、少しずつですが、生田緑地米をご家族へのお土産に持ち帰っていただきました。



第 11 回《冬の里山》



日時 2月11日(火・祝日) 10:00~15:00

場所 生田緑地

参加者 5年目 豊島芳璃人

3年目 山本来幸

2年目 駒松汰生、山崎慎悟、八代舜太郎

1年目 石井恵梨華、稲垣志帆、宇田晴俊、大島弥子、小林海音、佐藤りん、新保善文、鈴木彩香、
鈴木優香、薬袋吹喜音、目黒陽菜 16人

講師 岩田臣生、岩田芳美、梅原和仁、神山歩未、鈴木志歩、藤間熙子、中臣謙太郎、山本 晃

2月8日の雪が残る生田緑地で第11回「冬の里山」を開催しました。しかも、時折、小雪が舞う寒い日でした。

午前中は、その寒い生田緑地を歩きました。

生き物との出会いはあるでしょうか。子どもたちには、草と木の違い、落葉樹と常緑樹の違いを考えるというミッションを与えてみました。

谷戸の降り口には、こんな日でも、フコシャクの仲間が出ていてくれました。オスとメスがいましたが、種は異なるものでした。

翅の退化したメスは、子どもたちにはどのように見えたのでしょうか。



ここでは、どうみても枯草にしか見えない木本を観察しました。草と木の違いは一見ただけでは分からなくなっただと思います。



この辺りには哺乳類の足跡が沢山見られました。新しいものではなかったので分かりませんが、散歩の犬の足跡かも知れません。

ニワトコの葉痕を観察しました。これは落葉樹だと、直ぐに答えが返ってきました。冬芽が展葉し始めていました。幹や枝があるからと発言する子がいました。



雪投げが始まりました。標的はコナラでした。不思議なことに、雪合戦になりませんでした。走り回って、滑って転倒という事態は避けたかったので、黙って見ていました。

所々に雪だるまが残っていました。45年ぶりという大雪を楽しんでいる来園者が何人もいたようです。



ハンノキ林上の池は氷っていませんでした。
後で分かるのですが、田圃の水も融けていました？
今咲いている花があることも教えました。ハンノキの枝先には、雄花が沢山ぶら下がっています。でも、子どもたちには、花として見られないようです。



雪があると地形が露わになります。見慣れた景色が新鮮な景色に一変していました。



梅原先生も子どもたちも水流が気になったようです。開放水面を維持するように保全している水流です。結氷はしていません。



木道に見つけた雪だるまを更に大きくしようと頑張る子どもも現れました。



田圃の様子を見ていたら、男の子たちも降りてきました。スニーカーでは辛いと思いましたが、安全な場所を教えながら、雪を踏んで歩きました。



こんな雪の中でも、藤間先生について植物観察をしている子もいました。常緑樹の観察かな。
ウスタビガの緑色の繭がムクノキの枝についていました。「こんなに目立つと鳥に食べられてしまう」という子がいましたが、10～11月に羽化して、今は卵で越冬していますから、空繭です。
男の子たちは、ここでも雪投げに夢中でした。ここの標的は田圃下の池でした。



オナガが数羽、竹林で見られました。



コブシの冬芽を観察しました。



ツフブキの種子が飛ばされずに残っていました。





戸隠不動尊跡は御影石が貼ってあるため、その上は非常に滑り易くなっていました。これは危険です。
シキミの花が咲いていました。





芝生広場でも雪だるまがつくられたらしい痕跡が見られました。今日の子どもたちは、すっかり雪に夢中になってしまいました。



アセビの花が咲き始めていました。
しっかりと植物観察をしている子どももいました。



室内に戻ってから、お弁当を食べました。



お弁当が済むと、植物観察をしてきた子どもは、藤間先生と勉強していましたが、採集してきたキノコにキノコムシ?の幼虫がいました。



午後は修了式を先に済ませることにしました。

欠席の多かった子どもから順番に、修了証書を授与していきました。



その後、1年間の感想などを作文を書いてもらいました。

皆が書き終えてから、それを発表してもらいました。



先生方からも一言ずつ感想などを話してもらいました。

